

川の音

川の音

わたしの出エジプト記

歌 集
川 の 音

昭和五十一年二月二十日 印刷
昭和五十一年二月二十九日 発行

定価 一八〇〇円
送料 二〇〇円

郵便番号 三五〇
川越市六軒町一―一五―四

著 者 中 島 累 藏

発行者 伊 藤 幸 子

郵便番号 一七六

東京都練馬区中村北四ノ一五ノ一八
発行所 新 星 書 房

電話(九九九)四六八五番
振替東京八五〇六二番

目次

北 濤

北 濤

枸杞の芽

川の音

針うつごとく

霜の道

初夏周辺

鷺 山

鷺 山

七 九 二 三 四 五 六 七

祭	三
段平の死	五
心憂き日々	七
虫	三
齒 朶	九
蚕	一〇五
聖書日曜	二〇
小 湖	二四
怠惰な日	二七
冬	三三
孫	三九
墨 滴	一三七

八十路の春

一四

野天風呂

一五

奈良

一六

公孫樹

一七

秋ふかし

一八

山羊

一九

質

二〇

蕎麦

二一

夢

二二

パウロと共に

二三

母終唱

二四

あとがき

二五

川 の 音

北

濤

北 濤

海猫がああと鳴きつつ群れ飛べり江差の浜の
黒き岩礁（北の旅）

浜をゆきて海胆割る海女と話しつつその卵巢
の甘きを食ひぬ

地獄谷より吹き上ぐる硫黄の湯煙りの中に立
ちたり鼻を抑へて

ゆきくれていでゆにいでぬ駒ヶ岳このさわら
びの味噌汁の味

生鯛をつみたる舟が集まりて塩釜港の朝はか
がやく

太平洋を吹きあげてくる風強し襟裳岬の山の
樹低く（桜の丘）

灯台は大空衡きて立てりけり冬に入りゆく襟
裳岬も

岬の部落は春まで孤立すと暗き生活を誰もが
語る

庶野千本しよせんぽんといへる桜の丘に來ぬくらぐらとし
て夜の海荒るる

広尾ひろおより汽車は喘げりひらけたる十勝平野を
吹きわたる風

港より揚げし魚はあふれつつ街にこぼれて人
も家も臭し

釧路にてとれしばかりのあきあじの粒あざや
けき卵は甘き

ゆきゆけど根室草原はてしなくポプラ並木に
暮れ迫りたり

さいはての根室港の風強し千島列島を眺めつ
つ立つ

摩周湖の夜となりゆくしづまりにわが身一つ
を置くところなし

夜の闇に光る摩周湖もののけにおそはれしごとくわが逃れ来ぬ

摩周湖の湖心にわれを呼ぶ声す全山寂と暮れてゆく中